

2021
第7回

これからの建築士賞

「建築士」は日本の都市と建築にかかわる重要な職能資格であり、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注者など幅広い業務に携わりながら、未来につながる社会の実現のため努力してきました。近年では防災、環境、高齢化と人口減少、歴史文化の喪失など多くの課題の中で、その専門的な知見を生かしながら、魅力的な社会、街並み、建築空間の実現を目指して活動しています。

なかでも最近は他の建築関係の会とも連携し、それぞれの地域をベースにした協働も盛んになってきており、これらの新たな活動が大きな波となって地域社会の未来に力となる事も期待されています。多様な分野における建築士ならではの新しい動きに光を当て、顕彰し、支援するとともに広く世の中に伝えようとするのが「これからの建築士賞」の目的です。

募集要項

1. 賞の対象

都市と建築に関わる近年の活動や業績で、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注など建築士としての多様な立場を通じて行った未来につながる社会貢献に対して、その活動・業績を担った建築士もしくはそのグループを顕彰する。未来につながる社会貢献とは、たとえば、美しい景観の形成、安全で魅力的なまちづくりや空間の提案、自然環境や歴史的環境の保全、地球温暖化・人口減少・高齢化社会に対する提案、弱者に対する対策、文化・にぎわい・コミュニティの創出、建築に関する啓蒙・普及など多様であるが、さらに、これからの建築士の仕事を開拓するような、従来の建築士の枠を拡げる活動の応募も大いに期待したい。

2. 名称及び受賞数

これからの建築士賞 10点程度（但し、応募点数による）

3. 応募資格

原則として建築士もしくは建築士を含むグループで、活動のベースが首都圏にあること。過去の応募者の再応募は可とします。審査員が直接係った案件は応募対象から除外される。また審査員が所属する事務所、グループが審査対象となる場合は、その案件に係る一切の審査から外れるものとする。

4. 応募方法

別紙候補推薦書に記入の上、必要に応じて参考資料をA4用紙3枚以内にまとめて、事務局まで提出のこと。関係資料は返却されないものとする。郵送、メールによるデータの送付も可能。候補推薦書は東京建築士会ホームページからダウンロード可能。自薦、他薦を問わない。

審査結果

入賞6点（応募点数16点）

1	業績名 地ムービー	候補者名 株式会社ジュービー級建築士事務所 谷國 大輔	4	業績名 SMI:RE SHARE YOYOGI / ARCHITECT FUN	候補者名 進藤 強／株式会社ビーフンデザイン級建築士事務所 (協力:松本 悠介／松本悠介建築設計事務所)
2	業績名 京島アカデミックハウス 墨田区京島における学生による学生のための居場所づくり	候補者名 後藤 直也、杉山 英知、清水 靖真、鈴木 弘樹	5	業績名 港区立伝統文化交流館	候補者名 青木 茂
3	業績名 FUJIMI LOUNGE	候補者名 菅原 大輔	6	業績名 超薄肉コンクリート版(ハイブリッド・プレストレスト®コンクリート: HPC®)の開発とその社会実装	候補者名 細矢 仁

関連情報：話題の書籍

これからの建築士 —職能を拓ける 17の取り組み

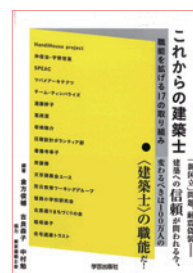
建築への信頼が問われる今、変わるべきは100万人の＜建築士＞の職能だ！

第1回これからの建築士賞審査結果を紹介した『これからの建築士—職能を拓ける 17の取り組み』（編著：倉方俊輔、吉良森子、中村勉 協力：東京建築士会）が出版されました。この賞の内容が詳しく掲載されています。

全国の書店・ネット書店で販売

定価：2,530円(税込)
発行：学芸出版社

<http://www.gakugei-pub.jp/>



総評文

大竹 由夏 (ものづくり大学講師、博士(デザイン学))

昨年度に引き続き、本年度も新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言発令と外出自粛の状況下により、選考はオンライン審査となりました。

今回応募頂いた提案の中には、活動の狭まるコロナ禍における計画がみられました。このコロナ禍において、多くの人々が新しいライフスタイルを受け入れ、人々の生活は大きく変化しました。コロナ禍に発生した計画が、自粛生活が明けたときどのように継続されていくのか、興味深く拝見させて頂きました。

また、DIYに関する作品が複数みられました。建築士でないとできないもの、建築士だからこそできたもの、様々ありましたが、建築士とそうでない方が協働して制作したものに魅力を感じました。

さらに、計画が始まったばかりの若い空間がありました。今後、どのような建築空間として育っていくのか、2例目3例目はどのように発展していくのか、大いに期待しています。

歴史性のあるもの、革新性のあるもの、この時代を見据えた柔軟性の高いもの、これからの建築士賞にふさわしい6作品が選出できたと思います。



大竹 由夏(おおたけ ゆか)

ものづくり大学講師、博士(デザイン学)／1982年生まれ／2006年筑波大学芸術専門学群卒業。2016年同大学院修了。2019年～東京建築士会事業委員／博士論文「漫画の場景と実際の眺望に基づく東京タワーの景観の保全・活用に関する提案」／主な作品に「筑波大学芸術専門学群A棟2階エントランス展示空間及び展示スペース」、「[待庵] 原寸再現模型(建築の日本展:その遺伝子のもたらすもの)」。

古谷 誠章 (東京建築士会会長、早稲田大学創造理工学部教授、NASCA代表)

今年から初めて審査に加わりました。建築士の社会的使命が多角化、多様化する中で、とても意義のある賞だと感じます。審査を終えてみて、実際に多方面での建築士の活躍に触れて、その実感を一層強くしています。建築を広く一般社会に理解されるものとするために、皆さんが様々な方法を模索し、実践されている様子に大いに敬服しました。ムービーという社会に広く認知された媒体を通して建築を身近なものにする活動、ボランティアな空き家対策や木造密集地帯の改善活動、自らの設計事務所を近隣社会に開く活動、設計者とオーナー、ユーザーをつなぐプラットフォーム、地域社会をつなぐコミュニティパーク、既存建築の長寿命化の実践、強靱なコンクリート建材の開発など、入賞者をただ列挙しただけでも活躍が多岐に及んでいることがわかります。

ポストコロナの時代を見据える長期的な視点に立って、「建築」という思考方法を持つからこそ可能な、時代に先駆けるような新機軸を打ち立てることのできる建築士像が求められています。入賞された方々の活動に大いに刺激されて、今後とも多くの皆さんに応募いただければ幸いです。



古谷 誠章(ふるや のぶあき)

1955年東京生まれ／1980年早稲田大学大学院理工学研究科修了／1980～1986年早稲田大学理工学部助手／1986～1994年近畿大学工学部講師／1986～1987年文化庁芸術家在外研修員(マリオ・ボッタ事務所)／1994年早稲田大学理工学部(現創造理工学部)助教授、NASCA設立／1997年～同教授／2017～2019年日本建築学会第55代

会長／2021年～東京建築士会第16代会長／主な作品:「茅野市民館」、「小布施町立図書館」、「喜多市市新本庁舎」、「静岡理工科大学建築学科棟」他／主な受賞:2011年日本芸術院賞「茅野市民館」／2014年日本建築大賞「実践学園中学・高等学校自由学習館」／2015年日本建築学会賞(業績)「『失われた街』模型復元プロジェクト」他

吉里 裕也 (SPEAC/R不動産代表)

今回で7回目となる「これからの建築士賞」。前回に引き続き、今回も審査を担当させていただいた。初回に受賞させていただいてから、これまでの受賞作品を改めてみると、建築士のシゴトの領域が明らかに広がってきているのを感じる。

これまで、課題を解決することから始まるが多かった建築士のシゴトが、課題そのものを発見することから関わり始めるという、建築に関わるスタンスが変化したことも大きいだろう。世の中の価値観やニーズも徐々に変わってきたのではないかと感じるし、建築士がこれまでやってきた多様で複合的なことを解決するという職能が、今の時代でこそ必要とされてきているということだとも思う。

これまでの本賞は、これまでの建築士は関わらなかった領域にまで踏み込んでいるという、スタンスそのものが、多くの評価を得ていたように思う。「これからの」という視点で、領域の拡大が重要だったのだ。

しかし、その建築の拡大領域は、この数年間で一次的には網羅された感があるのも正直なところだ。これからは、領域が拡大したことにより、生まれる事象の「質」や「継続性」がより重要になってくるといふ、成熟したフェーズに入ってきた気がする。

今後の展開に期待したい。



吉里 裕也(よしざと ひろや)

株式会社スピーク代表取締役、R不動産株式会社代表取締役／2003年に「東京R不動産」、2004年にSPEACを立ち上げるとともに、CIA Inc./The Brand Architect Groupにて都市施設やリテールショップのブランディングを行う／建築・不動産の開発・再生のプロデュースや建築デザイン、「東京R不動産」「lealllocal」「公共R不動産」等グループサイトの統括ディレクション、地域再生のプランニング等を行っている／共編著書に「東京R不動産」「だから、僕らはこの働き方を選んだ」「toolbox」「2025年の建築『七つの予言』」等。

吉村 靖孝 (早稲田大学教授／吉村靖孝建築設計事務所)

すでに成熟した基準に照らし顕彰する一般的な建築賞に比べ、「これからの建築士」賞の評価基準は曖昧だ。「これから」に向け踏み出した一步の方向はバラバラであるべきで、そもそも「基準」という考え方に馴染まないのかもしれない。また「建築士」賞という名称から言って属人的で、審査員の顔ぶれによる受賞傾向のブレももはや致し方ないかもしれない(すべての賞につきものとはいえ特に)。しかしながら、達成の深度については評価可能なのではないかと感じたのも事実だ。成果はないが可能性がある建築士には「これからの建築士奨励賞」、独自の路線を開拓しすでに十分な成果を上げた建築士には「これからの建築士業績賞」などを設け、賞の内容を正確に周知した方が、より効果的な支援につながるように思ったのだ。この賞自体が「これからの賞」だったフェーズから、それなりに権威ある賞へと脱皮する局面なのかもしれないと感じた審査会であった。「これからの建築士」が、そして「これからの建築士賞」がどうあるべきか、審査員として改めて考える貴重な二年間であった。



吉村 靖孝(よしむら やすたか)

早稲田大学教授、博士(建築学)／1972年愛知県豊田市生まれ／1995年早稲田大学理工学部建築学科卒業。1997年同大学院修了。1999年～2001年文化庁派遣芸術家研修員としてNVRDV勤務。2013年明治大学特任教授。2018年早稲田大学教授(現職)／主な作品に「フクマスベース」、窓の家、中川政七商店新社屋など。主な著書に「ビヘイ

ヴィアとプロトコル」、「超合法建築図鑑」など。

1

地ムービー

地ムービー 株式会社ジムービー一級建築士事務所 谷國大輔



地元☆ジモトの動画・映画＝地ムービー。

『地ムービー』は、地域・建築からの“まなざし”をコンセプトに、映画・動画に関する事業を展開しています。



オンライン事業

『地ムービー』®は（映画・映像業界の）マスコミ・媒体です。地域・建築を切り口に、国内外の映画・動画を紹介しています。作品に出てくる国・都市・地域・建築を詳しく掲載しています。

検索機能で、当該地域・建築が登場する映画・動画を見つけることができます。

『地ムービーWEB版』 <https://www.jimovie.jp/>

オフライン事業（リアル事業）

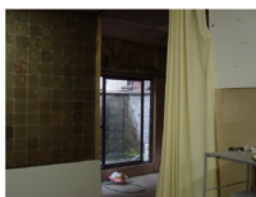
フィルムコミッション

オープンセット

全国の自治体・フィルムコミッションとも連携し、建築・街並みのロケ撮影による利活用、オープンセットの建造、動画・映画による地域活性化・まちづくりを推進しています。



イベント「地ムービー博・自転車映画祭・おいしい映画祭・地ムービーアワード」



各地のフィルムコミッションに建築・街並み等がロケ撮影に利活用される方策等について助言を行っています。

既存建物（店舗・住宅）の現況調査を行い、映画のオープンセットの建造につなげています。

中心市街地・商店街の建築（店舗・空き家・空き店舗）・オープンスペースにイベント会場を設営し、地域活性化を図っています。上映作品のロケ地の地域間交流も行っています。

それがどこかの街であれ、セットであれ、映画には必ず建築や都市が現れる。逆に、建築がさまざまな映画にインスパイアされてきたのも事実だろう。その蜜月関係に着目し建築士の新たな関わりを開拓した。映画のロケ地をアーカイブし検索機能をもたせることでポータル化して、その延長でまちづくりに関わった実績があり、また映画撮影に建築士として助言するなど、建築と映画の

双方に貢献している。CGを巧みに操る建築学生が映画CGの世界に職を得るのはまた違い、ともすればフィクションと一括りにされかねない映画を、現実の社会的な文脈の中に位置づける成果として高く評価された。

吉村 靖孝

京島アカデミックハウス

墨田区京島における学生による学生のための居場所づくり



後藤 直也
後藤直也建築設計事務所
/千葉大学大学院博士後期課程
清水 靖真
株式会社 清水構造計画



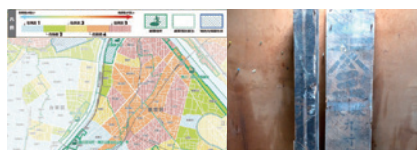
杉山 英知
スタジオエイチ
/千葉大学大学院博士後期課程
鈴木 弘樹
千葉大学大学院 准教授

2017年から2020年にわたり東京都墨田区京島で計画、実施されたプロジェクトである。長らく空き家となった住宅、工場、長屋の3棟を対象に4名の建築士が関り、千葉大学鈴木弘樹研究室の活動として「学生による学生のための住宅」を計画した。約3年間にわたる活動ではさまざまな調査やワークショップを重ね、大学活動に建築士が加わる事で、より高度な次元で建築を地域社会に実装させた実例である。

3つの課題解決に向けて

高齢木密地域

墨田区は都内でも有数の木造密集地域である。また、戦後から町人文化の続くエリアでもあり住民だけでなく建物自体も高齢化している。これを「高齢木密地域」とした。京島には住宅や長屋などで住み手のなくなった空き家が多数存在し、老朽化も激しく手付かずになっている。そのため災害時の危険度が高く、耐震性の不足、耐火性の欠如など様々な問題を抱えている。これらに対応していくことは急務であり、行政も動いているが効果的な一手は打てていない。一方で、高齢木密地域における空き家の中には魅力的な建物も多々ある。戦後の名残のある建物はその部材に関東大震災の復興時の材料が使われていたり、昭和初期の住人が手を加えた仕上げや装飾の名残など、歴史や文化を感じられる一面もある。



古いものを残す美学

行政の対策は古い建物を新しく耐火性の高い建築物へ建て替える際に補助金が出る仕組みとなっている。建築物は新しくなるが街並みは保存されず、同じような建物が出来上がることとなる。京島アカデミックハウスでは、日本に古来からある「ものを大切に使うこと」「もったいない精神」の考えから可能な限り既存の建物を残し、街並みを保存しながら課題を解決していった。「金継ぎ」のように、古い建物の悪くなっている部分、耐震性、耐火性で問題がある部分に手を加えることで、本来からある京島らしい街並みを残しつつ内部は新しく快適な住環境へと変えている。



学生の住処

東京23区内で唯一大学がなかった墨田区に2020年に情報経営イノベーション専門職大学、2021年に千葉大学がキャンパスを開設する。しかし、墨田区近辺はファミリー向けの住宅が多く、学生が住める価格帯の住処がない。せっかく区内に大学ができるのに学生は他の区や県から通学することになってしまう。本プロジェクトはこの点に着目し、上記2大学から徒歩圏内に、学生が共同生活を送れる、低価格の住処を計画した。学生への住まい供給は、同時に、周辺に散在する空き家の利活用、高齢化する地域コミュニティの活性化など、地域課題の解決に向けた一助にもなっている。



学生と建築士の関わり

本プロジェクトは大学研究室の活動でありながら、4名の建築士が関わっている。学生が主体では法規、構造、施工、コストと管理しきれないのが実状である。建築士である大学教員に加え、博士後期課程に所属し実務をしながら研究活動をしている2名に構造設計者を交え、より高い次元でプロジェクトを実現させた。学生の実践教育の場ともなっており、建築士による指導の元で学生がプランの立案、実施計画、施工計画、そして実際の施工までを行っている。建築士の知見と高い専門性を活かしつつ建築学科の学生と協働し、教育と社会への貢献の両面にはたらきかけたプロジェクトである。結果、当初の目的である学生が街に入り、学生のための居場所を作り、そして住み続けていくことでコミュニティへの参加、街を若返らせるためのスタートを切る実例となった。

2020年時点2棟の「学生による学生のための住宅」が実現した。その2つの事例を紹介する。歴史ある京島エリアを緻密に調査し、適応したデザインコードを設け、今後の更なる展開にむけて長期的な視野をもって取り組んだ実例である。空き家を利活用し地域のバリューアップに繋げるまちづくりの一環であることに加え、大学建築学科における実践と検証の場として、研究・教育の側面も持つプロジェクトである。

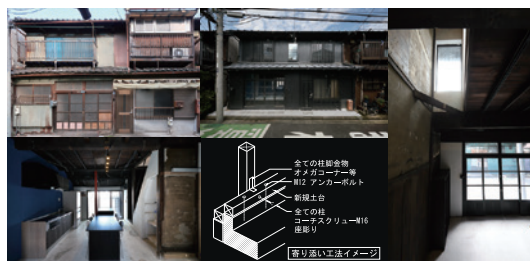
京島アカデミックハウス1

京島一丁目、木造2階建ての住宅と工場が細い路地の奥に向かい合って建っている。この2棟が対象である。2棟を改修し、間にある共有空間を地域に開くことで普段なら人の集まらない路地の突き当たりを地域の人の集まる場にしようと計画した。しかし、一部を解体しながら調査を始めると、木造2階建て住宅は基礎の状態が悪く、歪みが大いことから改修は現実的ではないと判断し、建替え(新築)へと切り替えた。工場は予算の関係で止まっているが、今後着手予定である。アカデミックハウスの共通のデザインコードの一つに「カラーコード」がある。新築でもこのカラーコードに基づき色を決めている。京島の街を調査し、街に染み出している色を抽出し、新しい建物でも違和感なく馴染むことを意図した。また、解体した建物から建具などの古材を回収し、再利用することで過去を引き継ぎ、残せるものは残すように計画している。



京島アカデミックハウス2

京島三丁目、昭和2年築の木造2階建ての長屋の改修である。四軒長屋のうち、空き家となっている二軒を対象とした。パッチワーク状に補修された外観に統一感を与え、街並み景観の向上と、地域に開いたプランにより、街のバリューアップを目指す。地場の工務店の力を借りつつ、解体から仕上げまで可能な部分は学生が施工を行った。学生の作業は延べ146人日である。耐震改修の一環として、既存構造体の材料強度試験を行い、約100年前の木材が、新築木材と遜色ない強度である事を確認した。鉛直部材の劣化に対しては「寄り添い工法」による改修を施した。空き家であった築100年近い建物に、新たな息吹を吹き込み、若い学生達が利用し続ける。高齢化する京島地域に新しい風になることを期待したい。なお、完成後は入居者のヒアリング調査などを行い、デザインコードが生活形態に与える影響などを追跡調査し、検証を続けている。



墨田区は、都内でも有数の木造密集地域である。延焼遮断帯形成などを定め、助成金の交付による建築物の不燃化を促進している。本プロジェクトは、墨田区京島地区にて、千葉大学鈴木弘樹研究室の学生と4名の建築士によって計画・実施されたものである。解体した建物の古材を活用したり、カラーコードを用いたりすることで、京島らしい街並みを残しつつ、街の若返りを試

みている。また、建物の問題のある部分に手を加えることを「金継ぎ」のよう表現していることに魅力を感じた。「学生による学生のための住宅」とのこと。京島アカデミックハウスに住む学生が、今後どのような活動をしていくのか楽しみだ。

大竹 由夏

3

FUJIMI LOUNGE

FUJIMI LOUNGE

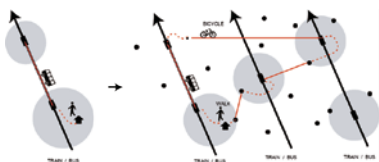
菅原大輔

SUGAWARADAISUKE 建築事務所 代表
FUJIMI LOUNGE 店長

本施設は、全国で地域拠点を設計する設計事務所にて併設された地域交流ラウンジでバス停前の立地を活かして地域に新しい回遊性を生む、バス、徒歩、シェアサイクルの乗り換え拠点にもなっています。かつてコミュニティの中心であった元酒屋の佇まいをそのままに設計事務所の書籍や模型室を街に開くことで地域の創作拠点も目指しています。

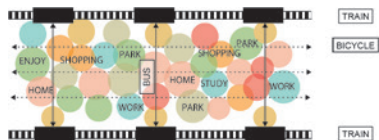
Omioro public network で地域を大きくアップデートする

micro public network とは、100 mの小規模拠点を広域に点在させ、バス・自転車・というモビリティと掛け合わせ、様々なイノベーションと共にネットワークさせる手法です。それは段階的な開発と小規模な投資によって、歴史的な風景を守りながら都市的な利便性をアップデートし、地方が優位性を持つ新しい社会に導きます。特に近隣住区と同規模の人口 5000 人程度のコミュニティは大きな可能性を持っているといえるでしょう。この人口規模は社会的インパクトを持ちながら、情報技術や自動運転、経済システムや働き方などのイノベーションに対して敏感に反応します。



○郊外における小規模拠点による「駅前からバス停圏へ」

2014 年の消滅可能性都市の発表以降、過疎地域での小規模拠点の役割が注目されています。そんな中、私たちは小さな民営の公共的空間を点在させ、ネットワークさせる micro public network の手法を全国で展開し、地域の新しい回遊性と活性化のお手伝いをしてきました。このノウハウを活かし、設計事務所併設したのが FUJIMI LOUNGE です。郊外のバス停圏では、人口減少や住まい方の変化によって空き家が目立ちます。そこで「駅前からバス停圏へ」をキーワードに、母体となる設計事務所と連動した様々な活動を通じて、地域内外に発信しています。



○イベント・空き家活用による

『STAY HOMETOWN』のまちづくり

FUJIMI LOUNGE は、地域の冠婚葬祭の中心にあった元酒屋の空き家をリノベーションし、2×15mの細長い土地と建築物の形状を活かした、地域拠点の新しい姿を目指しました。コロナ以降、第一回のロクダウンによる「STAY HOME」解除後、いち早く地域に留まる「STAY HOMETOWN」の眼差しを提示し、地域のコンテンツの重要性を訴えました。「STAY HOMETOWN」をまちづくりの機運と捉え、郊外型住宅地の新たな地域の在り方と住まい方の提案として、地域内外の人と物をつないだ食育や STEAM 教育などの体験イベントを行うと共に、調布市と新しい回遊性の社会実験や空き家の利活用手法開発を展開しています。



郊外住宅地の「まちのリビング」



バス停・シェアサイクルステーションと近接した「まちの交流交通拠点」



カフェとして建築事務所の半分をまちへ開く



地下の模型室を「まちの工作室」として開放



1FL 平面図 S=1:150

単にカフェ併設の設計事務所と見た場合は先行する事例が多くあるはずだが、しかし FUJIMI LOUNGE が面白いのは、カフェのテーブルがそのままも設計事務所のミーティング・テーブルとして使われている点だ。事務所の蔵書が街の図書コーナーになるし、給湯室が街のキッチンになる。模型作業台や工具を使ったワークショップなどは、まさしく街の工房となった証である。つま

り、新たに付け加えることなく読み替えるだけでできた公共空間であり、設計事務所の諸成分すべてを街の資産として開放する試みなのである。こういったプライベート・セクターによる小さな拠点は、地元スティするウィズコロナ時代の雛形ともなり得るだろう。

吉村 靖孝

SMI:RE SHARE YOYOGI + ARCHITECT FUN

株式会社ビーフンデザインー級建築士事務所 進藤強 + 松本悠介建築設計事務所 松本悠介

つながるしくみ

この取り組みは、建築家・大家さんを対象とした実践塾のようなシェアオフィスと建築家・大家さん・入居者をつなぐITプラットフォームの構築です。私たちは、この取り組みに先駆けて、従来の設計業務の範疇を超えた実践的な取り組みを2016年より継続的に行ってきました。そこでの役割は、設計者、事業者、運営者、利用者、時に施工者と横断的なものでした。

これらの取り組みを通して、人が交流することで生み出される価値に可能性を感じています。

“人”、“事業”、“コミュニティ”を育てる取り組みです。



SMI:RE DINER(2016-)

次世代の建築家・大家さんを育てる(SMI:RE SHARE YOYOGI)

経済と文化的理念の両立をめざす。

大家さんは経済性を、建築家は文化的理念を重視する傾向にあります。時としてその2つは相反する考えとして存在してきました。しかし、コロナ禍において働き方、暮らし方の価値観が多様化している今、そういった単一的な価値観では物事が成り立たなくなっています。そしてその傾向は今後も加速していくと予想されます。そういった変化に柔軟に対応できるフレキシブルな価値観や形式の発見が重要です。それらを獲得するために SMI:RE SHARE YOYOGI では、様々な業種の人が交流することによって相互に意見交換・学習ができるシェアオフィスを目指します。また、単に空間を貸すだけではなく具体的なプロジェクトを元に実践体験を提供する場となっています。体験を貸す空間の中で、建築の専門知識・経験だけではなく、ビジネスや人脈を築きながら独立・起業の準備をすることができる若手独立支援の側面も持っています。併設されているデザイナー、起業テナント、事業併業賃貸などでも、同様に他分野で起業を志す若手を支援しています。

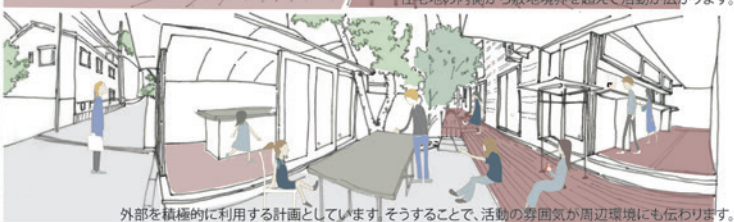
分野を越えた価値観の共有や人の繋がりを構築します。



シェアオフィスは、いろいろな人が出入り、交流する場の一角に、計画されています。内外が連続的な環境で、活動が流動的に展開されています。使われ方的にも風景的にも風通しの良い雰囲気の開かれた環境で、近隣住民の通り道としても利用されます。住宅地だから可能な親密なコミュニティの在り方を模索します。



住宅地の内側から敷地境界を超えて活動が広がります。



外部を積極的に利用する計画としています。そうすることで、活動の雰囲気が周辺環境にも伝わりやす。

建築家・大家さん・入居者のプラットフォーム(ARCHITECT FUN)

当社関連会社株式会社FUNは賃貸物件の管理・運営会社です。SMI:REという独自の賃貸物件サイトでBE-FUN DESIGNの設計物件を工事段階からコンテンツ配信し、入居者に部屋の魅力を直接伝え、竣工後もメンテナンスを行なっています。建築家が大家さんや入居者と繋がりを持つことで親密で広がりを持つコミュニティを作り出し物件のファンとなってもらうことで次の設計の依頼へと繋がっています。

ARCHITECT FUN は当社の賃貸物件サイト SMI:RE を全国ver.にアップグレードし、建築家による賃貸物件サイトとしてプラットフォーム化します。また、建築家にとって継続した収入源を得るためのビジネス改革にもなるサイトとしてリリースします。(2021年12月にリリース予定)

- ①使われ方のリアルな意見に触れる事で、自身の設計作業のフィードバック
- ②建物を通じて生まれるコミュニティが自走するまでのサポート
- ③将来のクライアントへの発展
- ④管理・運営に携わることで生まれるロイヤリティ収入

CONTENTS

物件の街や魅力を工事段階から様々なコンテンツで発信することにより、その物件のストーリーに共感できる入居者に入学してもらうことができます。



- 09_4階RC打設 2019.08.22 / 工事レポート
- 【カフェ】テラス席が気持ちいい、akariバル 2019.10.02 / 街レポート
- 竣工写真 2019.04.23 / 工事レポート
- Terrace Kukuna BBQ 2019.05.11 / イベント

協働の可能性

これらの取り組みは、プロジェクトチームメンバーやクライアント等と将来のビジネスパートナーへの発展を意図しています。

受注するプロジェクトの規模や性質によってメンバーが流動的に変動する在り方を想像しています。リクルートや働き方の新しいかたちを模索します。

大家さん、建築家が協働して経済性と文化的理念の両立をめざすことで、今までとは違ったまちづくりへのアプローチが可能になります。また、価値観を共有・共感してもらうことで、コミュニティやまちづくりに参加してもらえらるクライアントやチームメンバーが増えていくことを期待しています。



まちづくりに繋がるような“人”、“事業”、“コミュニティ”が育つことを期待しています。

本案の特徴は、リアルな場とプラットフォームを組み合わせることだ。若手の建築士に対して、シゴトにつながるかもしれない機会を創出し、それが結果、依頼主にとっても価値のある状況をつくりだす可能性を感じた。完成した後も長期的に物件に関わるというポイントのひとつだろう。その結果、建築への理念と経済性というバランスが最適化されることが期待される。

これまで建築士は、外部空間と内部空間、都市と自然等の関係性のデザインが中心だった気がする。本案は、人を含めた関係性をデザインしているといえる。

プラットフォーム構築やメディアの運営は、それなりの時間の積み重ねが必要となる。

今後の展開発展に期待したい。

吉里 裕也

5

港区立伝統文化交流館

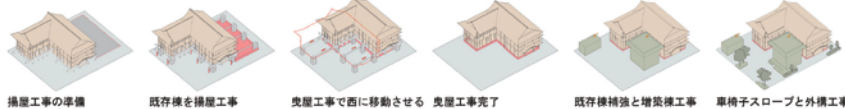
港区立伝統文化交流館
港区指定有形文化財旧協働会館保存整備工事

施設概要

昭和11(1936)年に建てられた都内に現存する唯一の木造見番建造物。置屋・料亭・待合からなる三業を取りまとめ、芸者の取次ぎや遊興費を清算する施設。目黒雅叙園の棟梁である酒井久五郎が手掛けた。平成21年に港区指定有形文化財に指定され、2年に及ぶ改修工事を経て「港区立伝統文化交流館」として令和2年4月に開館した。



工事工程のダイアグラム



耐震補強

建物の下に新たな基礎と耐圧壁を整備するため約2m掘削工事をした。掘削工事前の土壁や瓦を撤去して軽量化を図った。基礎の施工後に鉄骨レールを設置して西に約8m移動させる曳屋工事をして不同沈下対策をした。面格子壁の新設、土壁壁の新設と補強、構造用合板壁の設置、小屋裏の水平ブレースの設置により、木造の印象を損なうことなく耐震補強を行った。



文化財の保存と可逆性を確保した改変

「文化財建物の歴史的価値を現地保存すること」「積極的に活用するための安全・安心の確保」が求められた。構造材や木製建具等は保存整備を基本とするが、見番の時期以降の変更箇所は当初の形態に復元する。耐震性能の確保、安全性の確保、福祉利用のための整備について改修することとしたが、創建当時の状態に再現することが可能となるように改変を行うこと、即ち可逆性の確保が前提となる。公の施設として活用するために必要なエレベーターとスロープをはじめ、福祉玄関やだれでもトイレを整備するため増築の確認済証・検査済証を取得した。

地域の歴史の継承と地域活動拠点の整備

第二次世界大戦中に芝浦花柳界が疎開し、この建物は昭和19(1944)年に東京都の所有となった。戦後は港湾労働者の宿泊所として使用され、「協働会館」と呼ばれた。2階は日本舞踊の稽古場や地域の集いのために貸し出されていた。「百畳敷」と呼ばれる2階「交流の間」は落語や日本舞踊等の公演を行えるよう整備し、1階には建物や地域の移り変わりを紹介する「展示室」・「情報コーナー」、飲み物や軽食・甘味を提供する福祉喫茶「憩いの間」を整備した。

関係法令への適合と配慮

現況詳細調査を基に、保存・改変部分の設定を行い、港区文化財保護条例の規定に基づく現状変更の許可を得た。構造評定委員会により構造安全性の確保の検証を行った。防火地域に建つ木造建築物のため防火対策として「放水銃」を増築棟とポンプ室の上に設置した。

株式会社青木茂建築工房 青木茂

都内に唯一現存する木造見番の建物を曳家再生するプロジェクトを実行したもので、圧倒的な存在感を放っています。受賞者である青木茂氏はすでに長らくリファイン建築を提唱されており、「これからの」だけでなく、すでに「これまでも」大活躍されているのですが、その活動こそ三十年前にしてすでに社会に先駆けた活動を試行し、確実な成果を上げ続けておられるもので、その

時点にまで遡る気持ちで、この賞を差し上げたいと思いました。

今回の事業は、これまでのリファイン建築とも一線を画するもので、文化財としての価値を現地保存し、同時に積極的に活用するための安全性を確保するという、困難な課題に真っ向から取り組んだエネルギーを感じる快作です。

古谷 誠章

超薄肉コンクリート版(ハイブリッドプレストレスト®コンクリート: HPC®)の開発とその社会実装

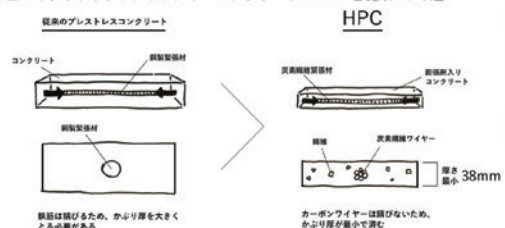
細矢仁(一級建築士事務所細矢仁建築設計事務所代表)(株)HPC 沖縄エグザクティブアドバイザー



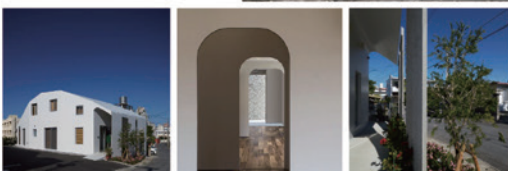
■ハイブリッドプレストレスト®コンクリート: HPC®の開発とその背景

RC 建築物は塩害や中性化の影響で鉄筋が腐食→体積膨張し、コンクリートを爆裂させる。更に塩分含有雨や酸性雨が染み込み、建築物劣化を促進する。沖縄では特に顕著である。そこで、高い耐久性と自重の軽減・高い意匠性の実現を目的として 2015 年に(株)HPC 沖縄(代表取締役:阿波根昌樹)の設立に参加。「腐食爆裂しない緊張材:CFCC®によるプレテンション導入+高強度コンクリート+繊維補強+ケミカルプレストレスの併用」を特徴としたハイブリッドプレストレストコンクリートを開発し特許取得。その社会実装として自社設計案件のみならず、関東・大阪など本州でも多数の案件で採用/技術支援を行っている。

■ハイブリッドプレストレスト®コンクリート: HPC®と従来 PC の違い



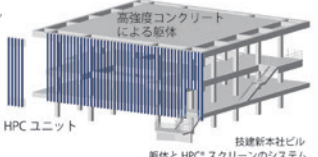
■HPC® 間仕切りスクリーンの実装
開発した HPC® の社会実装第一弾としてクリニックの日射遮蔽スクリーンと室内の間仕切りに採用。外部は緊張材に CFCC、内部 HPC® 間仕切には PC 鋼より線を採用。厚みを $t=38$ としてインテリアでは室内有効面積増と軽やかな連続性をもったシークエンスを実現している。取り付けは上下 2 辺支持とし、上部は小口にアンカーを取り付け、躯体と打設時に一体化させ端部を剛接合とし下部はピン接合として設計。

まんまる子どもクリニック
設計監理: 細矢仁建築設計事務所
HPC 間仕切り $t=38\text{mm}$ 上下 2 辺支持

■ユニット型プレファブ HPC スクリーンの設計開発と実装

高い曲げ剛性を持つ HPC® の特徴を生かしつつ、下地鉄骨が要らず、繊維で薄く成立させられる特性を生かした意匠性の高いスクリーンとルーバーを開発。沖縄の厳しい日射や台風時の暴風雨を適度に遮りながら、建築に軽やかな表情を持たせうことを実現。爆裂する心配がなく水セメント比の低い高強度コンクリートを採用することから、撥水材や塗装に過度に頼ることなく、一定の耐候性とメンテナンススパンの大幅な向上を実現している。ユニット型のルーバーはユニット単位幅 2500、高さ 8800 と輸送限界幅いっぱい計画し、現場での作業を極力減らし工期短縮にも貢献できる構法として有効。

HPC ユニットルーバースクリーン
H8800 W2500 D350~500 の
プレファブユニットとして成立
させている。
取り付けは上下 2 辺支持として
地震時はロックさせる金物
取り付けとしている。
ルーバー先端最薄 $t=25\text{mm}$

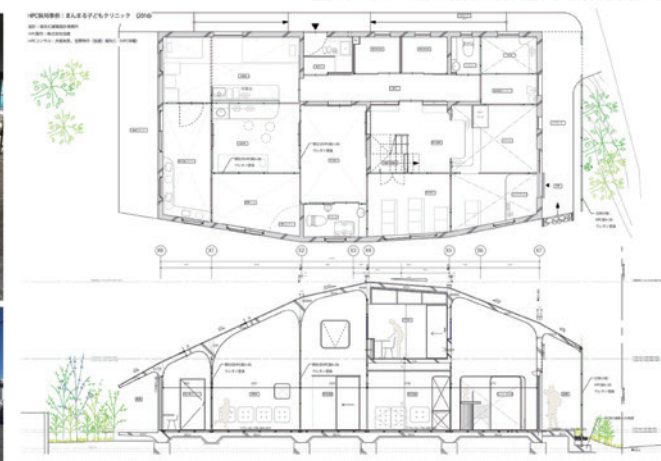
高強度コンクリート
による躯体
HPC ユニット
躯体と HPC® スクリーンのシステム
技建新本社ビル

■現在行っている発展的研究

- ・構造部材として使えるように建築基準法 37 条 2 項の認定取得を目指す。
- ・不燃材/耐火材としての認定取得予定→予備実験完了し本試験に向けた開発。
- ・CO2 削減に貢献する配合の開発→高炉スラグセメントやその他の材料を使った高強度コンクリートを開発中。HPC は錆びて爆裂する緊張材などを使わないため、コンクリートにアルカリ性を要しないことから多様な素材が採用可能。

不燃認定のためのコンコロレーター試験予備実験
©東京理科大学火災研究所 2021 0525ポルトランドセメントを使わない
配合で CO2 削減する配合の開発CFCC®
ハイブリッド®ポリプロピレン繊維
プレストレスト緊張材に爆裂することのないカーボン
ストランド:CFCC®を採用し、生コンには石灰火力
発電所由来のフライアッシュを混入した高強度コン
クリートを採用。水セメント比 28 とし緻密な組成。
繊維補強を行うことで曲げ剛性の高い性質を付与。

塩害が強く躯体の鉄筋を腐食させ爆裂を呈する環境が開発背景に。



まんまる子どもクリニック平面図/断面図 ©那覇市 2016 設計監理: 細矢仁建築設計事務所 担当: 細矢仁+森視庵

CO2 を排出して都市を作った時代から
CO2 を都市に貯留する時代へ
CO2 を大量に排出して製造されたセメントを使用せず、CO2 吸着骨材やクリンカーレスセメントを使った HPC® で使った
外壁やルーバーを社会実装することで、CO2 を都市に貯留しながら新しい風景を作る時代が目前に。

錆びることなく、塩害や台風などの瑕疵被害に強い、カーボンファイバーを緊張材としたコンクリートの開発を行っており、沿岸地区や海中建築への発展が期待される。また、プレストレスを導入して凝固させた、膨張剤入りコンクリートで、 $t=38\text{mm}$ の薄さを実現させ、非主要構造物の意匠材としての採用が進んでいる。勝連城跡周辺文化観光施設や技建新本社ビルなどに用いられている

ルーバーは、まるで組子のように抜け感があり薄く軽やかで、今までのコンクリートのイメージを一新してくれた。プレストレスによる圧着効果と繊維により、靱性もあるとのこと。建築以外の現場での活用も期待したい。

大竹 由夏